



企画にあたって

尾上健児

(奈良県立医科大学循環器内科講師)

21世紀に入り、ヒトゲノム計画によるヒトゲノムの解読がなされて以降、遺伝子解析技術の進歩も相まって、循環器領域においても多くの疾患発症に遺伝子の影響が関与していることが明らかになってきました。しかしながら、遺伝学的検査が治療選択肢に直結するまでに発展しているがん領域や神経領域に比較し、循環器疾患と遺伝子の関連は、いまだ解明されていない部分が多く、また、循環器診療における遺伝子の重要性を認識している循環器医も十分多くはないことも事実です。

本特集号では循環器疾患における遺伝子診断と治療について、研究レベルから実際の日常臨床で応用されている項目に至るまで、最新の知見を各分野のエキスパートの先生方に解説いただきました。ここまでまとめた循環器領域における遺伝子診療についての解説はかつてないものであり、ご執筆いただいた先生方に深く御礼申し上げます。

「識る」パートでは、単一遺伝子のレアバリエーションによる循環器疾患として従来から比較的報告の多い、心筋症や先天性QT延長症候群に加え、大動脈疾患や肺高血圧症についての解説、さらにコモンバリエーションの集積により疾患発症につながるポリジェニックスコアがいかに冠動脈疾患や心房細動など、循環器診療の多数を占める疾患に対して影響を及ぼすか、「診る」パートでは、循環器領域における遺伝学的検査の知識、実臨床における応用例、細胞レベルの新規解析法、さらにはわが国の近未来医療の道標ともなるべき遺伝子診療に先進的な米国の循環器遺伝診療事情についての現状および課題を、「治す」パートでは、個別化医療時代に向けてわれわれの進めるべき連携、知るべき最新の知見、そして取り組むべき課題について、それぞれ解説いただきました。

本特集号を通じて、近未来の医療ともいうべき、遺伝子解析情報を基にした診療が循環器分野でも実現しつつあること、そして遺伝子診断および治療がより上流の原因治療になりうることを理解していただけることを願っています。そして、より多くの循環器診療に携わる医師、そこを目指す研修医・医学生が、日常診療に遺伝子情報をどのように組み込めばより最適な医療につながるのか、また循環器診療が次のステージへと発展するためには次に何が必要なのか、これらを共に考え、取り組みはじめる一助となることを期待しています。